

PHD LETTER

〈24〉

1987・9

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace) 健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会
編集人:草 地 賢 一
住 所:〒650 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202 TEL.(078)351-4892
郵便振替:神戸1-29688財団法人ピー・エイチ・ディー協会
定 価:100円
レイアウト:エフ アンド エフ

- 「地域の国際化」セミナー報告……………P2
- 22人の研修生が教えてくれたこと—主事/増岡裕介……………P3



エビをとる漁師・東マレーシア

遠い国から客が来た
 たいしたもてなしはできないけれど
 川に舟をだし網を打つ
 両手に一杯エビがとれた
 「今夜はこれをつつきながら
 あんたの話をきこうじゃないか」

「地域の国際化」セミナー

この6月18日に、チャドウィック・F・アルジャー氏(オハイオ州立大学教授)、ポール・ファン・トゥンゲレン氏(オランダ開発協力情報全国委員会副代表)、吉田新一郎氏(アイディアハウス代表)をPHD協会に迎えて「地域の国際化」と題しての地域・市民レベルの国際交流・協力を考えるセミナーを催した。

アルジャー教授は、国連機関が国際関係に果たす役割や影響について研究していたが

し、「人々の国際問題の認識を深め、主体的行動を展開でき、外交政策に彼らの価値観が反映される新しいシステムの形成が必要である。それには、世界と結ぶ地域の情報や国際的視野を持つ人材を発見し、地域の身近な連関を認識し、意識的に関わる中で「地球規模で考え、地域レベルで行動する」態度が必要だ」とした。そして既存の外交形態について著書「地域からの国際化」の中で「指導者達が共通の問題に対処

ベルの関心や価値観が反映されるような新しい方法を発見しなければならないことを確実に意味している」と述べている。

また、トゥンゲレン氏は、第3世界との産直運動、自己課税による開発協力運動、80年代から西欧で盛んなコミュニティ・リンクキングの中心的推進者として地方自治体の開発協力にも携わっている。彼によれば、第3世界に関心を持つ市民からの要請に起源を発する自治体の開発協力は、現在オランダの250の自治体で地域の教育政策や福祉政策を考慮に入れて第3世界に関する情報提供を目的とした地域のイベントに援助したり、第3世界の開発プロジェクトを長期的に援助したり、また、第3世界の都市と姉妹関係を結ぶなどを実施しており、市民を巻き込んで地域の各種民間団体と協力しながら運動を行うことが重要だと述べた。このセミナーに参加し、国際化という言葉に惹かれ世界各地で生じている問題のみに目を向けるのではなく、内外の問題の接点を見つ具体的行動を伴ってこそ意味があるように思えた。

記 柏岡明生 学生(神戸大)

アルジャー氏の著書「地域からの国際化」はPHD協会でも扱っています。



地域の国際化セミナー ヒザを交えての会となった。左よりアルジャー氏、吉田氏、トゥンゲレン氏。

1972年にコロンバスに移り「世界の中のコロンバス、コロンバスの世界」というプロジェクトを開発・実践している。彼は、伝統的な国家システム・イデオロギーの枠内で行動することの危険性と愚かさを指摘

するために作った国家や国際的な政府機関は、あらゆる地域の人々の創造的な参加なくしては、相互依存関係の上に成り立った今日の世界の問題を解決できなくなっている。…国家や国際機関の政策に、草の根レ

第3回 草の根生活塾 レポート



ニワトリをしめて夕食のおかず。

今回で3回目となる草の根生活塾は8月5日から9日までの4泊5日、小、中学生17名と2名のPHD研修生、プラカスイ・コマさん、ニラカンティさんを中心に兵庫県篠山町、丹南町で行われた。初日は合宿地「たんば農文塾」でのプログラム。薪を使っての風呂付き、プラカスイ・コマさん指導によるタイ料理、食事のあとは地元城東中学の生徒さんを迎えたアジアナイト。研修生の出身の村のスライド上映、村の生活についての質疑応答があった。

2日目から子供たちは3人ずつ6軒の農家に分れて2泊3日の農業実習に入った。トマトの水耕栽培、有機農法による茶づくり、養鶏、養豚、菊の栽培など、子供たちの作業は農家によって様々であった。朝5時に起きてのスイカの出荷、暑い中での細い草抜き、鶏舎での採卵、またははじめは臭いにびびくりした豚舎での仕事など、子供たちにとっては初めての体験ばかりだったと思うが、このような農家の方々の生活との直接の触れ合いは、マチでの生活を見直す、またアジアの農村生活を考える際の貴重な材料となるだろう。

今回の草生塾での大きな収穫は、開催地、篠山の青年団、公民館の皆さんの積極的参加が得られたことであった。企画、農家依頼の段階から、開催中の様々なところで支えていただき、今回の成功は、皆さんの力なくしてはありえなかったと思う。8日夜のキャンプファイヤーでの「火の神」をはじめとする青年団メンバーの熱演は特に印象的なものであった。さらにタイとスリランカの研修生と寝食を共にしたことが、参加者と篠山の方々とのアジアの草の根の人々のつながりのきっかけになることを願ってやまない。草生塾が単に数日、自然を楽しんで帰るといったものでなく、集ったすべての人が、今回

の出合い、経験で得た種を、地域で、学校で、家庭で育てていくとき、この5日間の体験が本当に成功であったといえると思う。

記 小田博志(草生塾チームリーダー 阪大3年)

参加者レポート

草生塾で学んだことをいかして食べ物に感謝し、できるだけ残さないようにすることや、家でおやつだも、いままでもっとやりたいです。おにぎりをつくったのも初めてだったのでもっと練習します。(M. I. 小6)



農家出発の朝、自分でおにぎりを作る。

コマさんはおもしろい人でKさんに「たくさんはたらい、たくさん食べて大きくなる、あぁ太い、いいね、太い、いいね」とって言いました。Kさんはおこっていたけど。(H. S. 小6)

22人の研修生が教えてくれたこと

PHD協会主事/増岡裕介

ある障害者問題のセミナーで興味深い話を聞きました。「うさぎとかめの物語」の後日談です。「うさぎとかめが競争をして、かめが勝った。うさぎ村では、かめに負けてしまったとあって大騒ぎ。そこで再競争を申し込んだ。人(?)のいかめ村の連中も喜んで再競争に応じた。今度はうさぎが勝った。今度はかめ村が試合を申し込む。何度やってもうさぎが勝った。かめ村の村長は、どうしてうさぎばかり勝つのかかわからず、いろいろ考えた末に競争のコース変更を行なった。何と今度はかめが勝った。うさぎは全く歯が立たなかった。そのコースには、途中で大きな池があり、うさぎが池の手前で立ち往生している時、後かめがやって来たかめは、ちゃぽんと池の中に入り、スイスイと渡って行った。水の中の生活を得意とするかめにとっては、池など問題ではなかったのだ。うさぎは陸の上に住む動物。かめは水の中。これを私たち人間の生活にあてはめて考えると、うさぎはいわゆる健常者、かめは障害者とするのもできるのではないかと常に陸の上中心に物事を考えてしまい、相手の社会(水の中)のことは日頃の意識に少ない」この話は、障害者問題のみならずいろいろなケースに適用できる気がする。日本の人々をうさぎ、アジアの人々をかめとするならば、私たち日本人は無意識のうちに陸社会中心に物事を考えている気がする。水社会に住む人々の立場を考えると、すなわちアジアの人々の立場にたつて物事を考えることが、海外とのつきあいの中において、まず必要に思えます。外国人の人々と接することが、今後増え続けていくと思います。外国人の人と接していく上で、私は日本的思考のみで相手を受け止めるのではなく、柔軟な姿勢で対応していくことが必要だと強く思っています。文化が違えば物の見方、考え方も違ってきます。PHD研修生もこれまで5ヶ国からやって来ており、同じ国の中でも宗教の異なる人々もあり、価値観も多様です。日本にいるのだからというだけで、私は日本の常識を彼らに求めても、すぐには理解してもらえないこともありました。日本の価値判断は日本でこそ通じて、全世界で通じるものではないと感じました。私は彼らに拒否反応を起こした時もありま

したが、考え方が違って当たり前だと気楽に考え、できるだけ彼らが思うこと、感じていることを素直に心に受け入れ、そして相手にもこちらのことをわかってもらう、という姿勢が必要だと思いました。お互いが違いを認め、理解し合うところから、本当の意味の交流が始まると思います。

●●●

違う社会にある人々との交わりは、自らを知る良い機会だと思います。幸いPHD研修生は彼らの村のこと、日本との違い、日本との関係などをよく語ってくれます。彼らの国や村の人々が日本をどのように見ているのか、また彼ら自身、日本で生活してどのように感じたのか、なども教えてくれます。彼らが何げなく発した言葉が、私たちの今の日本の生活をふり返らせることも多くあります。これまで多くの研修生が一緒に私に言ったことがあります。「私たちアジアの人々のことを思ってくれるのはとても嬉しい。しかし、一番にあなたが考えなければいけないのは、あなたの家族のことだと思いますよ。家族の幸せを考えて下さい。私たちのことはその次でよいから」私は、この言葉は、とても耳に痛く響きます。研修生にしてみると、あまり家族の面倒をみない私が不思議で仕方がなかったようです。また、親と子の関係、教師と生徒の関係、家の周りの人々との関係を日本でみて、「発展の結果がこうならば、私たちの国は今のままの方がいい」という意見もききました。日本の生活だけを考えると問題にすべて外国の人々と接することが、今後増え続けていくと思います。外国の人と接していく上で、私は日本的思考のみで相手を受け止めるのではなく、柔軟な姿勢で対応していくことが必要だと強く思っています。文化が違えば物の見方、考え方も違ってきます。PHD研修生もこれまで5ヶ国からやって来ており、同じ国の中でも宗教の異なる人々もあり、価値観も多様です。日本にいるのだからというだけで、私は日本の常識を彼らに求めても、すぐには理解してもらえないこともありました。日本の価値判断は日本でこそ通じて、全世界で通じるものではないと感じました。私は彼らに拒否反応を起こした時もありま

本がいかにか東南アジアをはじめとする外国とその人たちのくらしと密接に結びついていくかを知ることが出来ます。そうすると必ずしも好ましい関係ばかりでなく、私たちにっては都合な、アジアの人たちにとって不利益な関係も見えてきます。日本のこれまでの経済発展は果たして日本人の優秀さ、勤勉さ(があったと仮定して)だけがもたらしたものでしょうか。日本の利益の反対に不利益をこうもっている人たちの存在があるとしたら、この関係を改善しない限りいくら一部で国際協力、援助などといった好むなしく思います。この関係の中の片方の当事者であるすべての日本人に住む人は、これに気づき、これを改めていくために、毎日の生活を考えなおしていくことが根本的に必要なことだと思います。互いの交わりから学び合い、自らをあらためて知り、相手に直接働きかけることもできることながら、自らのふるまいを正していくことが、自らのために相手にとっても良いことにつながるのだ。本当の意味で相手の立場を考えることだと思うようになりました。

●●●

研修生は、みんな自分たちの村や人々をとても愛しています。何か自分たちの地域や人々のためになりたい、困っている人々の生活を改善していきたいという思いを強く持っています。彼らを通じて彼らの地域の人々の生活改善のお手伝いをしていきたいと思えます。しかし、それだけでは決して彼らの村の幸せ(本当のところ、どちらが幸せなのかはわかりませんが)はやってこないでしょう。アジアの人々のためにお手伝いしよう、そればかりでなく、今の日本に住む私たちの生活のあり方が土台となって、アジアの人々の幸せにもつながっていくのだらうと思えます。国際交流・協力はイメージ的に華やかですが、結局のところ、現在の自分自身に戻ってくるものだと思います。研修生を育て、彼らの村づくりのお手伝いをすると同時に、私たち日本の生活をふり返ってみること、またできることから私たちの生き方を変えていくこと、このPHD運動を私たちは続け、広げていきたいと思えます。

研修生レポート

日本はプラスチック・ワールドだ

第5期研修生
チャールズ・アビクーン
研修報告

第4期生ジャヤンタさん、第5期生ニールカントイさんを送りだしたスリランカのボヤワラーナ村から、6月に村長であるチャールズ・アビクーンさん(42才)を短期研修生として招きました。ボヤワラーナ村はコロンボから車で約2時間のところにある農村で人口は約3300人。前村長で父親の後を継いで村をまとめています。



夜はくついでお国自慢もどきました。兵庫県小野市ふるさろう村

6月1日に来日し、神戸大学農学部保田先生による農業オリエンテーションの後、自らが推薦した二人の研修生の研修現地を訪れました。淡路を皮切りに丹波、但馬、播州とまわり、ジャヤンタさん、ニールカントイさんの学びの内容、お世話いただいたご家庭の様子を殆ど休みなしの1ヵ月で視察しました。今回の招へいの目的は①日本で学ぶ若い研修生の帰国後の村づくりへの取組みに、村の長老、指導側の理解を得、村人の協力が得



苗の作り方を尋ねるチャールズ村長。兵庫県八千代町

やすくなる環境を用意すること。②村長自身に日本の農業・保健衛生からの学びを得てもらい、今後の村づくりに役立ててもらうこと。③PHD研修の現場とその研修内容をつかみ、以降、よりふさわしい人材を選考してもらうこと。の3点にありました。ほぼすべての行程にジャヤンタさんが通訳をつとめ、日本の皆さんとスリランカの村長さんとの「村づくり」をテーマとした交流が、田畑で牛舎で鶏舎でして集会の場など、20ヵ所以上で行われました。チャールズ村長の日本でのご感想のうちあえて批判的な意見のいくつかを拾ってみます。「日本はプラスチック製品だけのプラス

チック・ワールドだ。必ず悪い影響があるにちがいない。スリランカでは使用を制限している。」「日本は同じ仏教の国と書いてきたが、日常生活の中に宗教心を感じさせるものがない。」「若い人たちが農業にたずさわっていない。このままだと日本の農業は亡び、すべての食糧を輸入するようになるのでは。」「どうして一軒の農家に単一機能の機械が数台もあるのか。我々なら一つのモーター、エンジンをフルに使えるよう工夫するのには、チャールズさんの学びをうまく使って、多くのことを我々に伝えてくれた1ヵ月でした。」「日本はプラスチック製品だけのプラス

PHD運動との出会いは、昭和58年当時の松山会長時代、山崎副会長(後に会長)らが岩村先生の「ネオバールの碧い雲」を読んで、先生を訪ねたのがはじまりでした。当時海友会は、国際交流の名のもとに何か協力できる事はないかと色々な試行を繰り返して来ました。その時岩村先生よりPHD運動の話を知り、私達海友会で協力できることがあれば、PHD運動の仲間入りをしていただけたわけです。海友会の主な行事は、外国青年を受け入れるためのホームステイ等交流し、和歌山県内各地で草の根国際交流をすることです。そこで、PHD協会の研修生として来日しているアジアの若者の研修を少しもお手伝いできたらと思い、毎年受け入れさせてもらっています。PHDの研修生を受け入れて感じる

ことは、彼らが非常に熱心であることです。日本を訪れる外国人は裕福な人が多いですが、PHD研修生はそうではありません。日本での研修に、本当に目的を持って来ており、そしてまたよく勉強するように思えます。海友会のメンバーは、せっかく海外研修に参加したのだからその成果を出すために、その経験を生かした国際交流の地域のリーダーとしてかばうには、どうするべきかと考え活動しています。これは簡単なようでかなり難しいものですが、会員全員が日本以外の国へ行った経験があり、外国の人々と身振り手振りで言葉交わそうという意識があります。これからもPHD運動を海友会の活動に取り入れていきたいと思っております。海友会会長 久保賢一

研修生 スケジュール表

	9月	10月	11月	12月
アリさん 漁業(漁具・漁法)	和歌山 有田郡 兵庫県	兵庫県 漁業家庭	東日本 研修旅行	兵庫県 漁業家庭
ブラカスイさん 農業(協同組合・畜産)	韓国 農村	兵庫県 農業家庭		兵庫県 農業家庭
ニールカントイさん 家政(洋服・手工芸・保健)	広島県 尾道市 山口県 下関市	兵庫県 上郡町 島根県 隠岐郡		兵庫県 上郡町

兵庫県内の様々な地域で、4月から農業実習を続けてきたブラカスイさん。日本の農業の現状を理解すると同時に、タイの山に帰ってから取り組むべき事、日本での後半の研修課題は何か、考え続けてきました。彼のみなならず、彼の村に考え続けてきたことは、協同組合の設立です。まだ彼の村には協同組合はありません。農産物1人1人が望んでいることは、協同組合を売ってしまいたい。農産物を持ってきて農産物にとても価値がある人1人が望んでいることは、協同組合を作ることにより、今の現状を改善させたい。農産物を作るグループによる協同を取り組むシステムを作る。今後は、後半の研修では、農業協同組合の理念、考え方・はたきについて深く学ぶと同時に、畜産・果樹についての技術も修得する予定です。比較研修として、韓国農村に約3週間滞在して学ぶことも9月に行います。

ブラカスイ・コマ



平鍋い・愛崎も学んだ 兵庫県丹波町

山本専務から竹を熱しノコ(かつを釣のサオ)づくりの指導を受ける。現在、日本ではほとんどガラスファイバーに切替わっている。

アリ・ムルティム

4期生ユリ君もお世話になった淡路島五色町柳さん宅で約2ヵ月の研修の後、和歌山県海友会の方々の手配による和歌山市の寺井さんのご指導(底引き網)、田辺市の水産増殖試験場での研修(ヒラメ養殖)を経て7月下旬から、伊豆半島西海岸に位置する田子の水産産漁業組合で約3週間、かつお釣の実習を行いました。静かな西スマトラの海とは異なる太平洋の波にとまどいながら漁法、漁具、潮目、気象のことなどの指導いただきました。乗船したのは56トンの八千代丸。陸では専務の御宅にお宅に滞在し、得たい経験させていただきました。お盆明けからは再び和歌山県、兵庫県で釣を中心とした研修をしています。



ニールカントイ

4月から兵庫県の大塚町、上郡町を中心とした地域で、家政全般の実習を続けてきました。6月に来日したチャールズ村長とも話し合いながら、彼女の日本の実習課題を3つに絞りました。①裁縫、手工芸 ②基礎的な保健衛生に関する学習 ③婦人会活動です。ニールカントイは、彼女の村の婦人にとって容易に取り組める種々の技術を持ち帰ることで、現金収入への道を開き、食料・教育・医療面への改善をも導入していきたいことや、村の婦人が集まって会を開いたりする活動をしたいという思いを、村づくりに協賛していただけたらとお願いしました。グループで作業に取り組む中で、保健衛生に関する学びをたしなめることをきっかけとして、村づくりに協賛していただけたらとお願いしました。グループで作業をたしなめることをきっかけとして、村づくりに協賛していただけたらとお願いしました。グループで作業をたしなめることをきっかけとして、村づくりに協賛していただけたらとお願いしました。

婦人会活動から学ぶ

7月23日兵庫県東部滝野町の滝野町文化会館で「滝野町くらしのフェスタ」が開催されました。これまでのジョーバナさん、ベリアさんに引き続き、今年もニールカントイさんがお招きをいただきました。この「滝野町くらしのフェスタ」はより質の高いくらしを創造し、賢い消費者づくりを目指して活動が続いている「滝野町くらしの会」(代表 白井悦子さん)の主催です。会場では、健康食品の展示、試食や焼き立てパンのチャリティコーナー、野菜の即売、各グループの発表が行われ、ニールカントイさんも日本語で挨拶をしました。ここ滝野町では、婦人会活動が大変盛んで、その会員数は1200人。年度初めに必ず会員同士でその年の活動の内容を話し合い自主的な運営を行ってられるとのこと。特に、1日1円募金運動は10数年前から継続されており、PHD運動始まって以来ずっとご支援下さっています。このくらしの



紙でつった籠を手にとって見るニールカントイさん。

フェスタでも婦人の方々の活動ぶりが展示発表されており、中でもリフォーム作品の展示会場では力作ぞろい。ニールカントイさんが熱心に見学していました。彼女にとって、この催しがこれからの研修に大変参考になったようでした。

草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

マニラからバスで北へ約3時間のところにヌエバ、エシマ州の小さな村シニピットがあります。この村は、第二次世界大戦中日本軍に抵抗した東南アジア最強の抗日ゲリラ「フクバラハップ」発祥の地です。私は7月6日この村を、コミュニティーオーガナイザーであったペニルダさんと共に訪問しました。ペニルダさんはこの村の地域組織化活動に取り組み、現在はフィリピン大学の大学院で「コミュニティーオーガニゼーション」を研究しています。現在彼女の努力が実って、この村にはさまざまな自立に向けての「オーガニゼーション(組織)」が生まれています。養豚、衛生、稲作等々。村人の意識は非常に高く、世界の経済状況、フィリピンがかかえる先進国との経済協力、及び国家再建の課題。その中で現在アキノ



第3回PHDカトマンズステーションミーティングを終えて 円内は連れて参加したニエランさん

大統領が進めている農地改革の問題点について鋭い認識を持っています。村は過去3年にわたり水が来ず、田んぼはカラカラに乾ききつています。その苦しさの中、肥料を減らして「IRRI—バラエティ(国際稲作研究所が開発した奇蹟の米)から、伝統的な品種に近いものに戻そう」というような。確かに収穫は以前の3倍から



左からプリチャー、ペリヤ、ウィラットさん 7/11 チェンマイで

4倍近くあがるようになった。しかし支出は4倍を超えた。第一は肥料代、労賃(以前は共同作業で無かった)、次いで農業機械とその維持費、更に病気の治療費。しかも経済支出に加えて村落共同体の崩壊、農業が原因と見られる病気、土壌・水の汚染。結局前より貧しくなった。我々は村の再建と同時に、「IRRI」に対しても研究方針の転換を求め、彼等も再検討を始めた」と指導者の意見が印象的でした。一連のこの運動は、試行錯誤の中で村人4名の村へも呼びかけ、郡役所と何回も交渉しつつ起きてきたこと事です。民主的な地域組織化運動が段々定着して来つつある中、この

村にはマニラの小学生や中高生がその民主化を学びに来たり、外国の農村開発に関わる人々の見学も多いとのことでした。来年2月から3月に、PHDの第5期研修生をこの村に滞在させることを決めて、次の訪問地タイへ出発しました。

チェンマイでプリチャー、ウィラット、ペリヤに会いました。プリチャーは5月にお母さんが亡くなり、この10月には第二子誕生予定と複雑な思いで少々やせていました。ムシキー村での実験農場は、雨がなく困難な中何とかが継続中、種が底をついたとの事でした。ウィラットは髪も髭も長く伸ばし、又時計も日本時間のまま。ポックオ村に帰ってタロイモ、ニワトリ、肥育牛の3つのグループ(各4人づつ)を組織し、自分のプロジェクトは、これら軌道に乗ったら

開始するとのことでした。一つ心配なことは、自分の村にタイの農民が入り、カレンの百姓が田んぼを貸してトマト栽培を始めている。ここで使われる猛烈な量の農薬がかなりの土と水を汚染している事だと聞いていました。ペリヤは12月までは日本に来る前の仕事をし、それ以降村の人々の栄養改善活動に取り組みとの事でした。現在、彼女は夜間高校に通い卒業したら更に看護学校を目指します。日本で与えられた知識を専門的に実現するつもりようです。こういう3人の働きを送り出し機関がよく調整するよう、トンカム総事や山岳民族自立センターのスタッフと話し合い、7月14日東北タイに向かいました。

昨年から調査を進めていた東北カラン県カウオン郡ウォンパム村を訪ね、サイナワン農民協会のバマルン議長と話し合った結果、付近の3つの村の農民協会から推薦された青年と面接し、ワラヤーさんを第6期研修生に選びました。PHD発足以来最初の女性の百姓です。7月21日小雨のネパール、トランプ空港に到着。懐かしいラダ、サンバさん達の出迎えを喜び、早速その午後から第3回PHDカトマンズステーションの会合を開きました。ラダさんは地道に今迄通り仕事の傍ら貧しい人々への編物、洋裁の教授、今回は2人

の生徒を連れて参加。サンバさんはカトマンズから一週間かかるダイレク村で4年目。



日本軍政時代の軍票 フクバラハップ発祥の地シニピット村で

すっかり村人の信頼を得て頑張っている。過去3年の間に45のトイレを作りました。しかし、この数年の異常気象で雨がなく大変さびしい。アマティアさんもカトマンズで3年間15人の養鶏グループを作り頑張ったが、相次ぐ病気でいつも鶏が死に絶え遂に自分1人になりました。しかし、何とか頑張りたいというのが現状です。ピスタさんは4年間に18のグループを育成し、村人の経済向上の為献身しています。ニエランさんはシャングジャで今後どうするかまた模索中。何かやろうとしても、草の根の動きに対する政府の監視がきびしく苦労しています。ショーバナさんは目下洋裁、編物をスラムの女性23人に教えています。既に約183,000円の売り上げを出せるところまでできています。というような報告を得ました。サイヒーさん、アディカリさんは残念ながら欠席。しかし2人も元気でやっているとのことでした。その後みんなで話し合った結果、10月から国内の交流を具体的に始めることになりました。



第6期研修生 ワラヤー・チットヨングさん 23才

した。サンバさんの村の婦人達が、ラダさんの所でピスタさんの村の婦人をショーバナさんの所で引き受け、最初は編物を3ヶ月教える。村に帰った婦人達が、その技術を分ち合って婦人の生活向上に役立っている。これが成功したら又拡大する。PHDはこの経費の一部を応援することになりました。一般に、村レベルでの交流、連帯が困難だといわれるネパールに、何とかしてその実験が成功する事を心から祈りながら、雨のカタマンズを飛び立ちました。今回の訪問で痛感したことは、何よりも交流の継続ということでした。一年単位の研修で終わるのではなく、粘り強く村の中に仲間が増え、地域全体が民主的に組織されていくために帰った研修生に関わり続ける。そこにPHDの働きの中心があるということでした。

草地 賢一

総主事メモ 関西国際協力協議会 総主事 草地賢一

去る6月16日、日本で最初のNGO協議会が関西で発足した。過去数年にわたって継続してきた「関西NGO連絡会」が発展継承して「関西国際協力協議会(KANSAI NGO COUNCIL)」が結成されたのである。協議会の主要な目的を我々は第三世界における貧困からの解放、社会正義の実現、人間の基本的ニーズを充足するための運動を発展させることにおいた。

読者の投稿

人を認める大切さを求めて

三河主一(神戸市須磨区)

今まで私なりに精一杯生きてきたように思います。6年前に同じ年の親友をガンで亡くしてから、少しずつ考え方が変わりました。それまでは自分のことがうまく先行する考え方がでしたが、30代に入ってから人を認めることの大切さがわかってきたように思います。私は知恵遅れの人々の福祉施設職員であり、私自身も障害を持っていますが、障害者、その他の人々、またアジアの人々を認めることが、いかに大切であるかということがわかってきたので。生きるということを考える場合にぶつかる問題は死の存在でしょう。友の死を通して考えたことは、死の対極にある生のあり方

とあり、一人だけの力で生きているのか、互いに他を認め合い支え合って生かされているのか、人間の生き方というのはどう捉えるべきものなのかということでした。私は自らの過去を振り返り、他を認めて自分も生きる、共に生きるということの大切さを感じるようになったのです。そして今、ある海外との関係を考えていますが、障害者、その他の人々、またアジアの人々を認めることが、いかに大切であるかということがわかってきたので。生きるということを考える場合にぶつかる問題は死の存在でしょう。友の死を通して考えたことは、死の対極にある生のあり方

早い。小回りもきく。それだけに専門性や継続性も要求される。このような意味で力量のアップが必要なのだ。力量とは活動展開上の技術や資質に留まらず、それを支える経済力も含まれる。金がなければ人も育たない。日本のNGOは一部の例外はあるかも知れないが、総じて慢性的資金不足に悩んでいる。このような苦境を乗り越えて、やはり日本のNGOを成長させたい。それは日本がアジア、全世界の人から兄弟姉妹として迎えられ生き残るために必要だから。

であり、一人だけの力で生きているのか、互いに他を認め合い支え合って生かされているのか、人間の生き方というのはどう捉えるべきものなのかということでした。私は自らの過去を振り返り、他を認めて自分も生きる、共に生きるということの大切さを感じるようになったのです。そして今、ある海外との関係を考えていますが、障害者、その他の人々、またアジアの人々を認めることが、いかに大切であるかということがわかってきたので。生きるということを考える場合にぶつかる問題は死の存在でしょう。友の死を通して考えたことは、死の対極にある生のあり方

の例にみるように、片方が相手のことを思いよかと思つたことです。裏目になる。いわんや、はじめから相手を認めない行為は許されざるです。自分と交わる対象には、相手の考え、生活があります。それを自分の価値観を押しつけ、変えてしまうことは考えものだと思います。相手の存在を尊重し、認めるということを忘れた国際関係は間違っていると思います。私は毎日の生活の中でも同じように、互いに相手を認めて生きていくことを大切にしたいと思っています。

PHD NEWS

関西NGO大学開講

新しく結成された「関西国際協力協議会」(KANSAI NGO COUNCIL)の最初の活動として、「関西NGO大学」が開かれます。皆様の参加をお待ちしています。お問い合わせはPHD協会まで。

期間	会場	コーディネーター・ディーン	テーマ	講師・ゲスト	実務研修
1 9/22(水) 9/23(木)	大阪YMCA 大塚研修センター	村上 公彦 アジア協会・友の会 事務局長	地域開発	長峰 晴夫 近畿大学教授	会議運営、ステイ アツターの運営
2 10/24(日)	黙想の家	草地 賢一 PHD協会 総主事	第三世界の 貧困	津田 守 大阪外大助教授	機関紙編集、プロ グラム・運動の組 織化
3 11/7(日)	福川会館	石田 進 ネパール教育協会 代表	開発と環境	岸根 卓郎 京都大学教授	ファイリング、 資料収集
4 1/14(日)	関西セミナー ハウス	小野 了代 ネパール難民救済 会代表	難民と女性	未定	英和文クロスホ ンダンス、海外、接 遇
5 2/10(日)	関西国際交流 センター	貞嶋 克成 大阪YMCA国際社 会青年センター所長	人権	李 清一 韓国基督教教会 副長	募金、メンバ シップ、キャンペ ーン
6 3/12(日)	関西セミナー ハウス	平田 哲 関西セミナーハウス 所長	民衆と開発	山下 政一 アジア保健研修 所事務局長	ボランティアレ ーニング、人事

費用/全期間20,000円(研修費、資料代含む)
毎回宿泊、食事代は別途必要です。(1泊3食6000円程度)
定員/30名

- 対象/①各団体のスタッフ及びボラン
ティア
②将来NGOの団体で働きたい
と思っている人
③全期間参加出来る人

JOCVとの学習会
国際交流・協力・援助について考え合う場
として、兵庫県青年海外協力隊OB会との

共催によるセミナーがスタートします。アジア・アフリカなどで活動した経験のある人々を囲み、決してその人々を先生として話し合うのみでなく、日頃から持っている疑問や考えをぶつけ合いながら、みんなで考え合い、新しい課題を見つけていく会です。第1回目は10月上旬を予定。神戸市内で行ないます。詳細は、お問い合わせ下さい。

東日本研修旅行

PHD研修生東日本研修旅行を、11月13日~12月1日の予定で今年も実施します。静岡、神奈川、東京、千葉、埼玉、山梨、長野、岐阜、三重、和歌山の各県を訪問。今年は、3名の研修生と草地総主事、計4名で廻ります。各地での皆様方との出会い、交わり、学びを楽しみにしております。訪問先近隣の会員の皆様方には詳細を別途ご連絡いたします。また、交流等をご希望の方々がいらっしゃいましたらご連絡下さい。

会費・ご寄附 寄託状況

5月	124件	1,967,270円
6月	99件	1,970,098円
7月	275件	1,644,658円
計	498件	5,582,026円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力をご感謝申し上げます。

タイ スタディツアーご案内

今年スタディツアーは、タイ北部山岳地域第3期生プリチャーさん、第4期生ペリアさん、ウィラットさんたちのカレンの村を訪ねます。3人の研修生を激励し、村づくりの現場から学びを得たいと思います。寝袋持参、各家に分かれての宿泊、日本を

見つけ直すいい機会として、絶対のおススメ企画。秋からは出発に向けての準備学習会もスタート。詳しい案内を用意。

期間/1987年12月20日頃出発～年内帰国
約10日間

行先/タイ北部 カレンの村

費用/約16万円

募集人員/15名



/編/集/後/記/

今年の2月、3月にやってきた研修生達も日本での生活に慣れてきました。日本語も日常生活では不自由しないようになりました。野性味あふれるたくましいコマさん、黒い大きな瞳が美しく素朴な笑顔をいつも

絶やさぬニラニーさん、物静かで勤勉なアリさん。3人の人となりがお出合いいただいた方々に溶けこみ、愛される過程を見るにつけ、言葉や人種を越えた人と人との関係が非常にシンプルなことに驚かされます。ジェスチャーや表情のみならず目と目を合わせる一それだけでも通じてしまう、そこにはお互いのハートがあるからでしょう。このPHDレターにも編集、執筆、製作、発送という段階を通して手がけて下さ

った方々のハートがこもっています。このレター作成に参加したいと思われる方、大歓迎ですのでどうぞご参加下さい。遠方の方でもかまいません。ご連絡お待ちしております。(K・K)

レター〈24号〉編集メンバー
赤松恵美子 川那辺裕子
坪 光子 芝 美代子
梶原 靖子 中島 洋子(五十音順)

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため掲載しておりません。